



相互行為と身体：電子メディア社会におけるゴッフマン理論の可能性を問う（特集 古典との対話：内在的理解から新しい読みと現代化へ）

速水，奈名子

(Citation)

社会学雑誌, 27/28:45-65

(Issue Date)

2011-12-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011110>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011110>



相互行為と身体

——電子メディア社会におけるゴッフマン理論の可能性を問う——

速水 奈名子

神戸大学人文学研究科学術推進研究員

本特集の共通テーマは古典社会学理論の内在的理解を通した、その現代化や応用可能性の検討にあるが、本稿ではE・ゴッフマンの理論を社会学の主要な古典の一つとして、現代社会に応用していくことの可能性を検討していく。特にここでは、電子メディア時代における同理論の応用可能性について考察を深めたい。考察を進めるにあたり、まずJ・メイロウィッツによつて提起された「電子メディア時代の相互行為論」を検討する。メイロウィッツは、ゴッフマンによる状況論とH・M・マクルーハンによるメディア

ア論を接合することを通じて、テレビをはじめとした電子メディアが普及した社会における、相互行為のあり方、特に行為者の認識や状況的役割の変容を分析するための理論的枠組みを提起した。ここでは彼の議論の意義を踏まえつつも、ゴッフマンが晩年に記したフレーム論を用いて、電子メディアが浸透した、現代社会における複雑な相互行為の分析、具体的には、行為者の認識や相互行為秩序に関わる分析を行うことが可能である点を、指摘していきたい。

はじめに

アーヴィング・ゴッフマン（一九二二—一九八二）は、社会学を一つのディシプリンとして確立しつつあった第二世代の社会学者たち——E・デュルケムやG・ジンメル——からの影響を受けつつも、第二次大戦後の社会学（現代社会学）に、T・パソンズ流のグランド・セオリーとは

別種の新たな地平、「もう一つの alternative」理論の可能性を切り開いた社会学者である。彼は一定の状況における対面的相互行為——直接、身体的に相互の面前に居合わせる時に諸個人が互いの行為に及ぼす影響関係 [Goffman 1959:74]——に焦点を当てた、いわゆる状況論に基づく社会学的分析枠組みを構築した。

ここでは、はじめにゴッフマン自身が、自らの社会学を

いかに位置づけていたのか、確認しておきたい。

私の究極的な関心は、対面的相互行為の研究を、自然に境界づけられ、分析的に整合的な領域——社会学のサブエリア——として発展させることである [Coffman, 1969:ix]

このようなスタンスに則ったゴッフマン理論は、これまでメイン・ストリームの社会学理論としては積極的に評価されることがなかった。上述した通り、ゴッフマンが多くの「優れた」社会学者にとっての分析対象であった、いわゆる「マクロな」社会構造分析を行うことを避けたことにその理由があると考えられるが、それに加えて、彼独特の「理論家らしからぬ」文体や方法論の曖昧さ（実際のフィールドワークとフィクション分析の混合）、体系性のない著作の構成などといった技術的な側面も影響してか、彼の理論は過小評価されてきたきらいがある [Giddens, 1987:一九九八・一五一]。

また、ゴッフマン理論は社会学のみならず人類学、心理学、言語学、そして動物行動学に至るまで様々なディシプリンの横断を通じて構築されたものである。そのためにもうしても、社会学の総合理論としての迫力にかけているように見えてしまうところがある。とりわけ、ゴッフマン理論には、人類学からの影響が色濃く反映されており、彼

は相互行為そのものを人類学者が行うように「自然主義的な」スタンスから観察・分析する手法を尊重し [Coffman, 1983]⁽²⁾、それをもとに相互行為状況内の法則を抽出していくことが重要だと考えていた。つまり彼は、フィールドを重視し、「身体としての行為者」がいかに状況内で行為を遂行するのかを、詳細に観察・分析していくことの重要性をわれわれに提起したのである。

しかし同時にゴッフマン理論においては、古典社会学の再検討、厳密には社会的行為や秩序といった、社会学上の基礎概念を自らの視点から再考察していく試みがなされており、そこから彼の研究は、単なるエスノグラフィーを超えた、普遍的な概念化の要素を備えた「理論」であるということができるだろう。このようなゴッフマン理論の特徴を、A・G・ファインらは以下のように定義している。

ゴッフマンの作品は、エスノグラフィーと社会学理論のちようど間に位置するようなものである [Fine, Manning and Smith, 1984]。

しかし、まさにこの「エスノグラフィーと社会学理論のちようど間に位置する」という性格こそは、ゴッフマン理論を再検討するにあたって、その再評価の核になるものであると筆者（速水）は考える。単なるエスノグラフィーで

もなく、社会学のいわゆる「体系論」でもない、その両者を含む理論。以下本稿では、ここに見る可能性を巡って論じていきたい。

本特集の共通テーマは古典社会学理論の内在的理解を通して、その現代化や応用可能性の検討にあるが、筆者はゴッフマン理論を巡る様々な言説を理解しつつも、同理論を社会学の主要な古典の一つとして、現代社会に応用していくことの可能性を検討していく。ゴッフマン理論は、これまで社会学において、重要であるにもかかわらず注目されてこなかった、日常生活における取るに足らない行為や、振る舞いの構造を分析するための状況論的パースペクティブを切り開いた。

ここでは特に、電子メディア時代における同理論の応用可能性について考察を深めたい。近年、携帯電話による音声通話や、電子メールを介したコミュニケーションが、世代、場所を問わず当たり前のように行われている。このように、電子メディアが浸透した現代社会特有のコミュニケーションのあり方をみると、ゴッフマンによって提起された相互行為論が今日でも有効なものであるのかどうか、といった疑問に突き当たってしまう。なぜなら、彼によって検討された理論は基本的に、身体的に居合わせる相互行為状況に焦点を合わせたものであったためである。

ゴッフマンは一定の状況における対面的相互行為がどの

ように組織化されるのか、また、行為者がどのようにに現実構成を行うのかといった問題を検討したが、彼自身は果たしてこのような相互行為論が、時代を問わず受け入れられるものであると確信していたのだろうか。ゴッフマンは一九八一年、彼がこの世を去る一年前に行ったアメリカ社会学会会長就任演説論文の冒頭で次のような発言を残している。

社会的相互行為とは厳密には社会的状況、つまり二人以上の諸個人が身体的に相互にいわせられるような環境において、独自に生起するものだと思ふことができます。おそらく、電話や郵便「を通じた相互行為」は、本来、本物のその縮図を提供するはずだ [Coffman, 1983:3] (強調は筆者(速水)による)

ゴッフマンは一九二二年に生まれているが、彼が生きた時代は、未だインターネットが日常生活における必須のツールとして定着していない時代であった。そのために彼は、自らの理論がメディアを介した相互行為の分析においても、理論的なモデル、ないし「縮図」を提供するものとして有効であると確信していた、と考えることができるだろう。しかし、ゴッフマンの予想に反して、現代社会における日常的な相互行為のあり方は、飛躍的に複雑なものへ

と変貌し、それらは質的な変容をも伴ってきている。

そのような時代の変化にに応じて、J・メイロウィッツは『場所感の喪失——社会的行動にたいする電子メディアのインパクト』（一九八五）以下、『場所感の喪失』と記すという著作において、電子メディアが社会的相互行為に与える影響についての考察を行ったが、彼はここで対面的相互行為分析を基調としたゴッフマン理論では、電子メディアが浸透した七〇年代以降の社会を分析するには限界があると指摘し、ゴッフマン理論とH・M・マクルーハン理論を接合するという画期的な手法を用いて電子メディア社会の分析に対応しようとした。メイロウィッツは、主にテレビや電話を中心とした電子メディアが行為者の行為に与える影響について状況論に基づいた分析を進め、相互行為秩序の維持が時代とともに困難になりつつある現状を検討している。

ここでは、メイロウィッツの議論——電子メディアを介した情報の流れが、現実認識を変える——を確認し、その意義を検討していきたい。次に、メイロウィッツの分析を超えて、様々な電子メディアが浸透した相互行為状況を分析するにあたり、ゴッフマンによって構築されたフレーム論が有効であるということを提起していきたい。筆者は、ゴッフマンが晩年に考案したフレーム論、特に同理論における身体という概念に着目することで、電子メディアが普

及した現代社会の分析が可能になると考えている。

一 電子メディア時代の状況論——メイロウィッツの見解

今日、社会の至るところで電子メディアを介したコミュニケーションが行われている。電車の中でも、会社でも、学校でも、人びとは携帯電話やスマートフォン、タブレット型端末などの画面などを見ながら、情報収集を行ったり、その場にいらない誰かと対話を行ったりしている。

二〇〇九年の総務省の調べによると、インターネットの普及率は（パソコン、携帯電話を問わず）全国で七八・〇％となっている。また、携帯電話からのインターネット利用機能については、五四・五％が電子メールの受信に利用していると答えている。このようなデータは今や世代を問わずして、多くの人びとが日常的に電子メールを介したコミュニケーションに関わっているということを示唆している。また、こうした情報機器に関する二〇一〇年以後の決定的な変化は、携帯電話とパソコンとが機能的に合体した携帯情報端末が日常的なものになってきた、ということであろう。

ここではまず、メイロウィッツによる『場所感の喪失』を検討することを通じて、彼自身が取り上げて分析してい

る、電話やテレビといった電子メディアが人びとの相互行為に与える影響について考察していきたい。メイロウィッツは、ゴッフマンによる状況論とマクルーハンによるメディア論を接合することで、電子メディアが浸透した現代社会における相互行為秩序のあり方を検討している。

電子メディアの機能を考えた場合、それは基本的に大きく二つのカテゴリーに分類することができよう。一つはマス・メディア装置として語り手がオーディエンスに向けて一方的に情報を提示するタイプのものです、テレビやラジオ、インターネットサイトといったものが代表的なものとして挙げられる。もう一つは、利用者間で相互に情報を提示し合うことができるタイプのものです、例として電話や各情報端末を用いた電子メール、あるいはスカイプなどによる画像と音声によるコミュニケーション、複数のプレイヤー間で同時に進行するゲームなどをあげることができる。

メイロウィッツは主に前者に属するテレビに焦点をあてつつ、状況・メディア・社会的役割（厳密には状況的役割）という諸変数を論理的に分離させながら、電子メディアが社会的行為／行動にもたらした特殊な効果を、多くの事例をもとに詳細に分析している。まずここでは、上に記した三つの変数のなかで最も複雑な概念であると思われる「状況」について、メイロウィッツがいかに捉えていたのかを

確認しておきたい。

彼は、これまで多くの状況論者が状況という概念を「物理的位置取りにおける行動」として捉えてきたと言及し、状況論者のひとりであるゴッフマンも、それを「知覚に対する障壁によって多少とも境界づけられている場所」と定義していたと指摘している（[Goffman, 1959:106]）。このことは、ゴッフマンが状況を物理的な場所として想定していたことを示している。厳密にいうと、ゴッフマンはこのような場所、すなわち「物理的セッティングにおける情報フロー」——行為者・イベント・天候など——が相まって形成する象徴的な意味の空間を状況として捉えていたということができよう。

しかしメイロウィッツは、電子メディアが浸透した現代社会において、状況を単に物理的セッティングにおける情報のフローにのみ限定することはできず、場所を超えた「メディアを介した情報のフロー」を含めて考察する必要があると主張する。彼は、基本的にゴッフマンが考えていたようにメディアを介した相互行為の大部分は、対面的な相互行為との類比で考察することができると考えていたが、しかしそれと同時に、電子メディアが入り込むことで状況の境界が動いた時に、人びとの行為に何が起こるのかを見据えながら、行為と「状況分離」の関係をもっと仔細に検討する必要がある、と考えていた（[Meyrowitz, 1985=

二〇〇三・八八・八九」。

メイロウィッツはこのような見解に立ちながら、一九七〇年代から普及率が高まった電子メディアの影響によって、格段に拡張した情報フロアの現実を多彩な事例をあげつつ説明している。その一例として、彼はテレビの普及による子供の行動と認識の変容を取り上げているので、ここで確認しておきたい。

個人化が進んだ現代社会において、親とは別に自分の部屋にテレビをもつ子供が増えている。このような子供たちは、学校から帰宅し、夕食を済ませると、親と別の部屋に籠り、一人でテレビをみたり、電話をしたりして過ごす時間が多くなっている。また、そのような現状を、親は監視しない（できない）ことが多くなっている。

このような日常生活を通じて、子供たちは親の監視の行き届かないところで、様々な情報を得ることになる。メイロウィッツは、電子メディアが可能にする「隠されるべき情報」の流れ——例えばポルノの流出をはじめとした、子供の目の届かないところに隠されていた情報の流出——が、これまで、あたりまえのように形成されていた「文化的空間」の構築を困難にしていると指摘した。つまり、電子メディアがそれほど浸透していない従来の社会においては、子供に「与えるべきではない」とされる情報はセーブされていた。そしてそのような習慣が、「大人の世界」／「子

供の世界」という空間の差異化を確保していたことができる。しかし、現代社会においては、そのような区別を明確にすることが、非常に難しくなってきたり、とメイロウィッツは指摘している。

彼はマクルーハンの議論を受け、電子メディアが普及した時代に限って、なぜこのような事態が起こるのか、その影響力を印刷メディアとの比較を通じて検討している。ここで確認しておきたい。メイロウィッツによると、印刷メディア、つまり新聞や雑誌といったシンボルを介した活字媒体は「言説的・離散的な」特徴をもち、それらは本来、理性によって認識、解釈されることが求められている。しかしその一方で、テレビをはじめとした電子メディアは、映像そのもの（または写真やイラストの多用）、つまりアイコン的メッセージの提示が主としてあり、それらは「表出的・現示的な」特徴をもっている。このような特徴を備えたメッセージは、基本的に理性ではなく感情によって把握されるものである。すなわち、電子メディアとは、利用者の身体感覚（感情）に直接訴えかける効果を持っているために、活字媒体である印刷メディアに比べて即時的で、幅の広い（幅広い世代に受け入れられる）情報の提供を可能にするのである。

また、メイロウィッツはゴッフマンの理論を用いて、そのような電子メディアの影響が、相互行為にどのようなように

持ち込まれるのか分析しているが、彼はその際、ゴッフマンによって提示された「裏局域 back region」／「表局域 front region」という概念を検討している [Goffman, 1969]。両者は物理的に区切られた空間であり、通常「裏局域」で行われていることを、「表局域」の成員は知ることができない。しかし「裏局域」の参加者は、「表局域」をモニターすることが可能である。

ゴッフマンは、これらの概念の一例として、レストランにおける状況配置の例を挙げている。レストランにおいてウェイターは、「表局域」である「客席」にいる時、礼儀正しく丁寧な態度をとることが一般的に要請されている。しかし彼が一旦「裏局域」である「厨房」に入ると、仲間と客の悪口を言ったり、客からのチップを勘定したりすることが可能になる。この例を通してゴッフマンが指摘したかったことは、「表局域」の秩序は「裏局域」の存在を確認できないことによって保たれているということである。何らかの不都合が生じ「裏局域」が「表局域」に開示されてしまうことがあると、「表局域」／「裏局域」両者の秩序は同時に崩壊することになる。

上述した例に照らし合わせると、「大人の世界」は、従来「表局域」の成員である子供にとっては「裏局域」であって、知ることのできない世界であった。つまり、「子供の世界」は「裏局域」である「大人の世界」の存在に気づかない（気

づかされない）ことで保たれていたのである。しかし現代社会においては、この「裏局域」と「表局域」という境目それ自体が、電子メディアの介入によって、有効性を失い、機能しなくなってしまうとメイロウィッツは主張している。

彼はこの他にも、テレビやインターネットを通じた情報の流出により、従来アメリカ社会において国家の象徴とされ、威厳を放っていた大統領が、今では国民の「友達」のような存在へと変化している現状を局域崩壊のもうひとつの例として挙げている。ここでメイロウィッツは、テレビをはじめとする電子メディアが提供するイメージが、日常生活に入り込んでくることで（例えば大統領が過ごす日常生活のイメージ）、それを見る一般の視聴者が持つ「特定の世界」への認識が、変容していく様子（大統領に親近感をもつようになる）を分析している。つまり、これまでの伝統的な社会において、国民にとって大統領をとりまく空間は「手の届かない世界」として認識されていたが、電子メディアを介して、その世界を垣間見ることができるようになる今日では、それが「それほど遠くない世界」、すなわち「親近感の持てる世界」として認識されるようになってきている、と彼は指摘する。

メイロウィッツは、電子メディアの日常生活への浸透が、このような現実認識の変容をもたらしていると指摘すると

同時に、日常的な相互行為が、今や——対面的なものには集約しきれず——電子メディアの影響によって拡張され、また、電子メディアの侵入によって、物理的セッティングとしての境界性の無効化に迫られていると主張している。

二 後期ゴッフマン理論におけるフレーム分析

ここまで、メイロウィッツによる議論を検討してきた。『場所感の喪失』において、彼は、電子メディアの影響を受けて大きく変容した相互行為の今日の実情、そしてその効果が行為者の認識・行動を変容させている現状を、ゴッフマン理論とマクルーハン理論の融合を通して明確に提示していた。メイロウィッツは、ゴッフマンによる状況論を基盤にしつつも、ゴッフマンによる対面的相互行為論に基づいた状況の概念を、電子メディアを介した状況にまで拡張させる必要性を指摘し、状況論を現代社会に適応可能なものと発展させたことができるだろう。

メイロウィッツが主張するとおり、ゴッフマン理論は基本的に物理的セッティングを基調とした状況論であるために、現代社会に適応させるためには補うべき側面が多いかもしれない。しかしここでは、このようなメイロウィッツの考察を評価しつつも、その限界と、むしろ彼が充分に認識していなかったと思われる、ゴッフマン理論の可能性を

検討していきたい。

メイロウィッツは主にテレビという電子メディアに着目しながら、従来、確保されていた場所性の差異化が困難になりつつある現状を詳細に分析していた。その中でも特に、彼の議論はテレビが伝える「時空を超えたイメージの影響力」に焦点が当てられていた。しかしここでは、テレビのような一方向的にオーディエンスに向けて情報を発するマス・メディアではなく、携帯電話をはじめとした相互通信が可能な電子メディアに関わる現状を、取り上げていきたい。

本章の冒頭で確認した通りに、現代社会においては、電子メディアを介した相互行為——携帯電話などを用いた音声通話や、電子メールを介したコミュニケーション——に至る所で確認することができる。これらのメディアは、相互的なコミュニケーションを可能にする装置として社会に広く深く浸透しており、行為者はその利用を通じて、新たな相互行為の場を展開しているということが出来る。ここでは、このような電子メディアを介した相互行為の輻輳性、およびそこに見ることが出来る秩序の問題を、ゴッフマンが後期に展開したフレーム論に依拠しながら考察していきたい。

テレビをはじめとした電子メディアが、人間の現実認識に与える影響力を重視したメイロウィッツは、ゴッフマン

のいう対面的相互行為が物理的セッティングに限定されており、電子メディアによるその拡張、ないし電子メディアの侵入による、物理的空間としての境界の無効化に敏感でなかった、と指摘していた。

ゴッフマンの前・中期理論が成立した時代が一九六〇年代半ばであったということもあり〔Collins, 1980〕、確かにそのような指摘は否めないが、しかし他方で、ゴッフマンが後期に展開したフレーム理論——経験の組織化に関わる認知論的考察——、特にそこに見る身体という概念を再考していくことを通じて、筆者はむしろメイロウィッツを超えた現代的可能性を読み取ることができる、と考える。なぜなら、ゴッフマンのフレーム論は必ずしも対面的相互行為状況、すなわち物理的セッティングに限定された議論のみを扱ったものではなく、日常生活を組織化する認知枠組みがいかに形成されるのか、物理的な場所を超えたフレーム活動について仔細に分析したものである。

ゴッフマン理論全体を通して考えると、彼の主たる考察対象は——メイロウィッツが指摘する通り——対面的状況における行為分析にあつたということができるかもしれない。しかし六〇年代以降、社会学理論における新たな潮流として現象象学的社会学やエスノメソドロジーといった一次的構成体を巡る理論が、より注目を集めるようになり、ゴッフマンはこれらの理論に対抗すべく、独自の認識論を

七〇年代はじめに体系的な形で提起した。その集大成が『フレーム分析』（一九七四）である。

シュッツは自らが展開した現象学的社会学において、「社会的世界」の類型や、「レリバンズ」といった概念を基盤に、時間的思考を踏まえた経験の構造について考察を深めた。その際、彼は日常生活を「至高の現実」として捉えつつも、同時に多元的現実論を展開し、行為者が日常的に様々な現実を行き来する経験のあり方について言及していたが、このような状況ごとにくり広げられる現実の組織化——冗談をいう、空想にふける、といった現実の移行——すなわち、現実の多層性を考慮に入れた認知活動の分析については、シュッツによる理論よりも、ゴッフマンのフレーム論によつて、より一層詳細に検討されている〔片桐、一九九三・八〇・八一、速水、二〇〇六・九二・九三〕。

それでは、ゴッフマンが晩年に表した『フレーム分析』に提示した「フレーム」という概念を彼がいかに定義していたのか確認しておきたい。ゴッフマンによると、フレームとは基本的に経験を組織化する行為者の認知枠組みである。またそれは、行為者の相互疎通を可能にし、世界（一定の状況）を意味付けする枠組みでもある。

ゴッフマンは、この概念を人類学者のベイトソンの理論から影響を受けることを通じて、自らの理論に援用している。ベイトソンは、進化論的発想のもと、人間の認知フレー

ムと、その他一部の哺乳動物のそれとは、基本的に接点を持つものであるという立場をとっていた。また彼は、実際に多くの動物行動を観察することを通じて、それらがフレームの転換に関わるコミュニケーション能力をもっている、と仮定していた。ゴッフマンはバイトソンが考察した次の例を、『フレイム分析』に取り上げているので、ここではそれを確認しておきたい〔Goffman, 1974:4047〕。

バイトソンは、哺乳動物の行動を観察し、彼らが遊びを可能にしている様子——フレイムの転換を可能にしているという事例——を提示した。バイトソンによると、人間のようによこばの世界を生きない動物は、身体を介したサインを互いに感じ取ることによって「コレハ遊びタ」というフレイム理解を遂行している。まじめな状況、喧嘩の状況、そして遊びの状況、共に客観的には同じような振る舞いであっても、フレイムの働きによって動物の経験は多様に転じられているのである。

このようなフレイム転換は、動物行動学的な観点から説明すると「ディスプレイ display」といわれる身体的コミュニケーションを通じて行われる。ディスプレイとは、動物のムードサインを伝達する儀礼化した振る舞いを指す（これによってコミュニケーションの路線設定が行われる）。上の例に当てはめると、動物がお互いに発する、遊びの開始をほのめかすフレイム転換のための、儀礼化された身体

的表出がそれにあたる。ディスプレイは身体化された知識、すなわち「身体知 embodied knowledge」であって、人間を含む哺乳動物は互いにそれを視覚的に確認しあいつつ、さらには知覚的に感じあうことによって、フレイムの転換を可能にしている。

バイトソンは、このような動物行動学的儀礼が人間のコミュニケーションにおいても機能していると指摘し、人びとは無意識のうちに他者のディスプレイを感知し、フレイムを転換しながら、経験を組織化していくと主張した。バイトソンにとって無意識とは（フロイトによるその概念定義とは異なり）、習慣に関わる無意識であって、それは人びとが意識する必要がないほど深く習慣化、身体化している行為者間の感情的関係性のパターンを指す抽象観念、すなわち「感情の演算規則（アルゴリズム）」を指している〔Bateson, 1972=2002:37〕。

バイトソンは、人間のコミュニケーションが、言語的メッセージと身体的な非言語的メッセージという二つのレベルから成立していると指摘し、主に後者がメタメッセージレベルとして機能し、前者のメッセージレベルのコンテクストを決定する役割を担うと主張していた。つまり、非言語的メッセージとしてのディスプレイは、一定の状況をフレーミングし、言語的メッセージの意味を決定する役割を担っているのである。

ゴッフマンはこのようなフレーム論を自らの理論に援用しているが、彼はその概念を独自の観点から再定義している。ここではそれを確認しておきたい。ペイトソンに習い、ゴッフマンは個人の「経験」そのものが、このフレームの働きによって可能になると考えていた。ゴッフマンの比喩に即して表現すると、フレームとは「もともと意味のない出来事の流れ strip を、ひとつの経験的世界として組織化するための枠組み」である（彼は「出来事の流れ」＝被写体、「フレーム」＝カメラ、そして「現実」＝写真という比喩を提示している）。また、ゴッフマンがフレームを個人に先行する「社会的装置」であると主張していたことも重要である。つまり、フレームとは認識枠組みという、非常に個人的・個別的なものを指しているのであるが、それは同時に、一定の規則性を有し、人びとの認識を制御するものでもあるのだ。

それでは、ゴッフマン理論におけるフレームの構造を確認していききたい。彼はまず「原基的フレーム primary frame」というものを想定し、近代社会における原基的フレームは、「自然的フレーム」／「社会的フレーム」の二大フレームによって構成されていると指摘した〔Goffman, 1974: 21-26〕。前者は物理的世界を認識するためのフレームであり、後者は社会的意味の世界を認識するためのフレームである。彼は、人びとの現実が、両フレームが組み

あわさった原基的フレームを基盤に構成されており、日常生活においては、それが状況ごとに「転調 keying」されていくことで、多様な現実——まじめなフレーム、遊びのフレーム、喧嘩のフレーム——の経験が可能になると指摘した。

また、この転調の作用は、フレーム自身が持つバルネラブルな性質からくるものであり、それは行為者間におけるデイスプレイ読み込みによって促進される、とゴッフマンは考えていた。ゴッフマンは、人間の相互行為における、このデイスプレイの機能を「ムーブ move」とも呼んでいる。ムーブは主に身体的な非言語的メッセージが担っているが、人間の相互行為においては、言語的／非言語的メッセージという二元論は曖昧な部分があり、常に後者がメタメッセージになるとは限らない。ムーブはこのような特徴を備えているものの、行為者は状況ごとに相互にこれを読み込むことで、現実を多様に組織化すると考えられている。

本稿で重要な論点は、ゴッフマンがこのフレーム論をもとに「物理的空間ではなく、『フレーム』を境界とした『社会的空間』という発想」〔Goffman, 1974: 22-23〕、そして「個々のフレームは内在的秩序性をもちながら、そこに同時に、錯綜しときに矛盾した複数のフレームが伏在しながら交替していく」〔Goffman, 1974: 53〕、という二つの発想、アイディアを理論化していた点である。このような観点は、物

理的セッティングを超えた電子メディアを介したセッティングにおける相互行為を分析していくうえで、非常に有用なものであるということができるだろう。以下では、このような理論的枠組みが、電子メディアの浸透した現代社会において、いかに有効なものであるのか検討していきたい。

三 ゴッフマン理論と電子メディア社会

メイロウィッツの議論で強調されていたことは、メディアが一方向的に提示する「意味内容」が、受け手の現実、厳密には「局域」の認識や「状況的役割」を変容させる力を持っているという点であった。つまりここでは、メディアが与える「意味内容」——特に「局域」崩壊にかかわるインパクトの強いイメージ——が人びとに及ぼす影響について焦点が当てられていた。

メイロウィッツは、発展し続けるメディア社会における、「場所感」の変容を巡って、説得力のある議論を展開している。しかし、それでもなお、メイロウィッツがその現代的展開の必要性を指摘した、ゴッフマンによる「表局域／裏局域」という概念は、現代社会において有効なものであると筆者は考える。なぜなら、これらの局域の内容は徐々に変容してきているものの、基本的には二つを分かť境界がなくなってしまうという事態になっていない、(或いは

おそらくこれからもならないだろう、と思われる)ためである。例えば、「子どもの世界／大人の世界」という「表局域／裏局域」を考えると、家庭におけるインターネット普及率が格段に増加した九〇年代以降、それらを介したポルノ画像・動画の流出など、メイロウィッツが指摘したような諸現象が顕在化した。しかしその一方で、このような事態の反動として、行政や市民社会を基盤に、規制運動や統制活動が起こり、ネット社会を取り締まる動きが出てきている。

もちろん、電子メディアが大衆社会に普及することで、人びとの日常的認識が大きく変容した、というメイロウィッツの主張は正しいが、しかし、厳密に考えると、人びとは電子メディアがもたらす「バーチャリアリティ」を安易に引き受け、自らの世界を拡張する一方で、「現実の世界」においては、行き過ぎた報道や道徳律に反した情報を察知した際には、それらを制裁の対象として議論や運動、そして規制を行い続けている。

つまり、このような認識の変容は、メディアが一方向的に提示するもののみに左右されるのではなく、人びとが「現実社会」において行う議論や運動、それらを通じた統制によってもコントロールされているのである。このように考えると、電子メディア社会における認識の変容に関わる議論は、状況論のみに依拠して考えることは難しく、むしろ

社会構造論と共に考察していく必要があるように思われる。

本節においては、ゴッフマン理論をもとに現代社会におけるコミュニケーションスタイルの変容と、それに伴う人びとのフレイム活動について考察を深めていきたい。マクルーハン以降、メイロウィッツをはじめとした多くのメディア論者は、バーチャルリアリティの侵入に伴う、人びとの「認識の変容」を指摘してきたが、電子メディアとは、このようなマス・メディアとしての機能を担うだけではなく、時空を超えたコミュニケーションを可能にするツールとしても、人びとの生活世界に入り込んできている。

以下では、このような携帯電話や電子メールをはじめとした、コミュニケーション・デバイスとしてのメディアの使用が、日常化している相互行為状況の分析に、ゴッフマン理論を応用していくことが可能であるという点を明確にしていきたい。考察の出発点として、まず、携帯電話（音声通話）を介した相互行為とフレイム転調について、ゴッフマンが考案した「ムーブ」という、いわゆる身体知に基づいた概念を基調に分析する。これらの考察を通じて、対面的な状況のなかに電子メディアを介したコミュニケーションが組み込まれる複雑な相互行為スタイルにおける秩序問題を、ゴッフマン理論によっていかに分析できるのか、その可能性を探っていく。またここでは、電子メディアを

介したコミュニケーションにおいても、身体知が重要な役割を果たしているという議論を補強していくために、電子メールを介した相互行為におけるフレイム転調の際に、人びとが使用する「絵文字・顔文字」といったツールの機能について、ゴッフマン理論における「身体」に関わる議論に依拠しながら考察していきたい。

三——音声通話と身体——身体知のおくゆき

携帯電話や電子メールの使用により可能になった、相互行為の新たなスタイルとして、同時に複数の相手とコミュニケーションを行うスタイル——対面的な相互行為を行っている最中に、携帯電話で別の人と話したり、別の人にメールを送ったりする——を挙げることができる。このような相互行為のあり方が可能なのは、状況ごとにあるルールを人びとが暗黙のうちに察し、相互行為秩序を維持するように努めているためであると考えられる。ここではゴッフマンのフレイム論におけるフレイム転換と身体の関係に着目しつつ、人びとが電子メディアを介したセッティングのなかで、無意識のうちに従っている行動のパターンと経験の組織化について検討していきたい。

既に述べたように、ゴッフマンは『フレイム分析』のなかで「物理的空間ではなく、『フレイム』を境界とした『社会的空間』と『発想』[Goffman, 1974:22-23]、そし

て「個々のフレームは内在的秩序性をもちながら、そこに同時に、錯綜しときに矛盾した複数のフレームが伏在しながら交替していく」[Goffman, 1974:53]、という二つのアイディアを理論化していた。つまり、彼は物理的セッティングに捕らわれることなく、相互行為分析を行う可能性と、さらには状況の複雑性を検討するための理論的アプローチを同書の中で展開していたのである。この観点は——メイロウィッツの考察を越えて——、ゴッフマン理論が、電子メディア時代における相互行為分析を行う際にも、応用可能なものであることを、示唆している。

一定の物理的セッティングにおいて、行為者が電子メディアを用いて、同時に複数のコミュニケーションを行うというシーンは、現代社会においてよく見られるものである。例えば、対面的相互行為を行っていた行為者が、携帯電話を受信することで、これまで没頭していた対面的相互行為のフレームを切り換え、携帯電話の向こう側の相手との間に新たな象徴空間を形成するというようなシーンなどが、これにあたる。

このような状況におけるフレームは、ゴッフマンが指摘したとおり、ムーブのあり方によって多様に変容されるものである。携帯電話のベルに反応して、それに受け答えをするときにできるフレームは、対面する他者のムーブによって断ち切られる場合もある。例えば携帯電話に没頭する行

為者に対して、対面する他者からの身体的メッセージ（「いい加減に電話を切ればいいのに……」とむつつりした表情を浮かべる）が提示されることによって、またもとの対面的相互行為のフレームへの移行を促されるといった具合に、行為者のフレームは多様に組織化されていくのである。

また、ここで重要になってくるのは、身体的に居合わせない他者との間でフレーム活動をいかに遂行するのかという問題であるが、周知のとおり、ゴッフマン（ペイトソン）は、身体知とは単に視覚に訴えかける身体表出のみを指すのではなく、声のトーンなどを含む知覚的な側面をも含んでいる、と考えていた。したがって、電話の相手がいかなるムーブを切り返してくるか——電話の向こう側の他者があまりにも取り乱した声で話す場合は、彼／彼女と共有するフレームの方が、対面的な他者とのそれよりも、強固なものになる可能性が高い——によって、フレームは自在に転調されていくことになるのである。

このように、ゴッフマンの「フレーム」概念は、電子メディアを通じて多様な現実に関わる現代人の認識のあり方、そして、その状況における相互行為秩序の有り方を検討するために有効なものである、ということができるだろう。メイロウィッツは、電子メディア社会を分析するにあたり、ゴッフマン理論の限界を指摘したが、彼が後期に展開したフレーム論は、メイロウィッツが中心的に検討したテ

レビの普及以降の、携帯電話やインターネットが浸透した社会の分析に、応用していくことができるように思われる。

三二 電子メールと身体——なぜ顔文字を使うのか

ここまで、携帯電話のような電子メディアを介した相互行為においても、ムーブ、すなわち身体知が相互行為秩序を維持していくために、重要な役割を果たしていることを検討してきた。以下では、「顔」のない空間である、電子メール空間における相互行為と、そこに見られる「身体」としての「絵文字・顔文字」の機能を分析していきたい。この考察を通じて、ゴッフマン自身が電子メディアを介した相互行為が「本物（対面的相互行為）のその縮図」であると指摘したことの意義を再考していく。

現代社会における電子メディアの浸透は、一人の人間が同じ空間に居ながらにして、多様なフレイム活動に参加すること、すなわち多様な現実認識をもつ機会をさらに促進させた。既に確認したとおり、ゴッフマンは晩年に「フレイム論」に依拠しつつ、現実の組織化についての認知的考察を深めていたが、そこで彼は身体知がもたらす効果について言及していた。

その際、ゴッフマンはバイトソンの理論において用いられていた、フレイムの概念を自らの理論に取り入れていたが、この概念は状況を意味付けする認知枠組み——象徴的

な意味空間——を指していた。ゴッフマンはバイトソンに習い、人間のコミュニケーションが、非言語的メッセージ（メタメッセージレベル）／言語的メッセージ（メッセージレベル）という二つのレベルによって成立しているとし、主に後者が前者のコンテクストを決定する役割を担うと指摘した。つまり、非言語的メッセージは、一定の状況をフレーミングし、言語的メッセージの意味を決定する役割を担っていると考えたのである（同じ「ばかだな」という言葉でも、身体表出の伝わり方によって意味が変わる）。このように、彼は身体知に根ざしたコミュニケーション、すなわちアナログ性の強いコミュニケーションが、行為者間の象徴的空間を構築するために主要な機能を担っていると考えていた。

しかし、電子メディアが浸透した現代社会におけるコミュニケーションのあり方をみると、身体知そのものが「本質的に」重要なものであるのかどうかといった疑問に、必然的に突き当たってしまう。なぜなら、今日の相互行為スタイルの変容を考えると、電子メールによる相互行為をはじめとした、身体性、すなわちアナログ性を排除したデジタルコミュニケーションが広く浸透しているためである。メイロウィッツが指摘するように、現代社会における日常的空間には、テレビやインターネットサイトのようにイコニック、アナログ的なメッセージを送出する電子メディアが

多数存在するが、それと同時に、電子メールのように、メッセージをデジタル化する動きも起こっているのである。

しかし、このようなデジタル・コミュニケーションにおいても、絵文字や顔文字といったアイコン的メッセージを挿入することで、メッセージにアナログ性をもたせる動き（現在、日本で発売されている携帯電話のほとんどの絵文字機能がある）、つまりデジタル・コミュニケーションにおけるアナログ性の復活が顕著にみられる。

例えば、「おまえは、バカだから」というメッセージを送信する際に、この文章の最後に「おまえは、バカだからな㊤」という身体的、アイコン的記号を付することで、受信者はこのメッセージが文字どおりの意味（侮辱）を表すのではなく、冗談や慰め、いたわりのメッセージなのだと解釈することができるのである。つまりこのような顔文字は、一つの文章をフレイミングし、言葉の意味を明確にすることを助ける機能を担っていることができる。現代社会においては、このような顔文字の利用が日常的に行われており、それは単に、親しい間柄においてだけではなく、チャット形式の販売サービスなどにおいても、客と販売員の間で広く活用されている。

しかし、このような顔文字は、身体（知）と機能的にはほぼ等価であるものの、当然のことながら、身体そのものではない。上述の例が示すように、絵文字、特に顔文字は、

送り手と受け手の間に象徴的な世界をつくる働き、つまり言語的メッセージの意味を明確にする機能をもつ。しかし、対面的相互行為において、身体表出が作り出す空間と、顔文字が作り出す空間の間には、前者が「非意図的」なもので、後者が「意図的」なものであるという差異がみられる。つまり、前者は基本的に状況に即して（「非意図的に」）発散するもの、後者は可能性の高いものであるが、後者はそれとは対照的に、受け手が言葉の意味を取り違えないように「意図的に付け加えるもの」である。

当然、対面的相互行為においても、行為者が意図的に自らの身体表出をコントロールし、身体表出を発散しているかのように演じることができるし、また逆に、電子メールを介した相互行為において、精神の高ぶりの効果によって、思わず（深く考えることなく）顔文字を付してしまうこともあるだろう。しかし、顔文字は基本的に身体知の代用物であり、身体感覚として備わっているメッセージを客体化したものであって、身体表出そのものとは本質的に異なるものである。

しかしここでは、このような違いを念頭に置きつつも、顔文字の使用をアナログ性の強いコミュニケーションへの志向として捉えたい。なぜなら、日常生活における電子メールの交換の多くは、即目的に行われており「いま、ここ」の感情に依拠することが圧倒的に多いためである。そのよ

うに考えると、顔文字の使用——「顔」のない空間に、わざわざもう一度「顔」を連想させる記号を挿入すること——は、身体知らないしその「模造」(ゴッフマンのいう「縮図」)として利用されていると考えることができる。

通常、身体知の効果が期待できる間柄であれば、顔文字など使用せずとも、送り手の意図を言語的メッセージからの確に読み込んでいくことが可能だろう。しかし、そのような間柄であっても、絵文字や顔文字を利用する現状を考えると、人びとは身体知を頼りに、より明確な象徴的空間を形成しようと互いに勤しんでいると捉えることができるのである。

ここまで、電子メール空間における絵文字・顔文字の効果についての考察を行ってきた。ゴッフマン(ペイトソン)は、フレーム転換を担う要因として身体知の重要性に言及したが、電子メールというデジタル・コミュニケーションの場において、あえて絵文字や顔文字が使用される現状は、身体知に基づいたアナログ性がコミュニケーションにおいては重要であるということを物語っている、ということができないのではないだろうか。また、ゴッフマン自身が指摘した通り、電子メディアを介したコミュニケーションにおいても、フレーム転換や相互行為秩序を維持するための基本的なルールは、対面的行為におけるそれ、すなわち、身体知に基づいたムーブの読み込みに依拠しているというこ

とができるように思われる。

おわりに

ここまで、ゴッフマン理論の現代社会分析への応用可能性を検討してきた。考察を進めるにあたり、まずメイロウィッツによって展開された、「電子メディア時代の相互行為論」を検討した。メイロウィッツは、ゴッフマンによる状況論とマクルーハンによるメディア論を接合することを通じて、テレビをはじめとした電子メディアが普及した社会における、相互行為のあり方、特に行為者の認識や状況的役割の変容を分析するための理論枠組みを提示していたが、本章ではそれを踏まえつつも、それを批判的に発展させてゴッフマンが晩年に表したフレーム論を用いて、現代社会における、電子メディアが組み込まれた複雑な相互行為スタイルにおける、行為者の認識や相互行為秩序にまつわる分析を行うことが可能であることを確認してきた。ここでは、電子メディアを介して複雑化する相互行為状況においても、身体知を基盤としたムーブの読み込みが、現実の組織化や相互行為秩序を維持するために重要な役割を果たしている点を考察した。また、電子メールを介した相互行為において、多くの人が利用する絵文字や顔文字といったツールが、生身の身体の「代用物」、すなわち模造Ⅱ模

像であると同時に、象徴的空間を構築し、フレームに対する規定力をもつものとして機能している点についても、検討してきた。

ゴッフマンはムーブなどの概念を提示しつつ、相互行為における身体の役割を強調していたが、彼が指摘する通り、電子メディアを介した相互行為であっても、身体知レベルのコミュニケーションは象徴的空間を形成するためにも、また相互行為秩序を維持するためにも、基盤になるものであるように思われる。つまり、電子メディアを介した、多層で複雑な相互行為状況においても、状況認識を円滑に行っていくためには、身体知に基づいたムーブの感覚が重要であり、ムーブの読み込みが的確に行える限りにおいてのみ、多層な現実構成や、状況そのものの秩序維持を可能にすることができるのである。

ゴッフマンの社会学的考察は、まずフィールドに密着した内在的な観察、エスノグラフィーを出発点としながら、そこからの概念化を同時に図るというスタンスをとるものであった。

彼はフレーム転換の構造分析を行うにあたって、(ベイトソンにならい) 対面的相互行為状況を実際に観察し、そこに見られる身体間のコミュニケーションを基調にした考察を行っていた。ここから、ゴッフマンが生涯、エスノグラフィーを基調としつつも、概念化を図るという理論構

築のスタンスそのものを貫いていたということが確認できるだろう。また、『フレーム分析』において展開された概念化は、対面的相互行為を基盤としたものでありつつも、身体知を基軸に電子メディアを介した相互行為における現実の構成に関わる分析に応用できることも確認できた。

ゴッフマンはこのようなスタンスに立ちながら、従来の社会学理論家が問題にした規範や価値の問題よりも、身体という側面に着目し、いずれの文化圏にもみられる、「普遍的な」行為や振る舞いの分析、そして現実の組織化に関する分析を行った。このような分析枠組みは、共通の価値が希薄化し、さらには相互行為スタイルが多様化した現代社会を考察するにあたり、重要なものであるということができるだろう。その意味で、「エスノグラフィーと社会学理論のちようど間」という彼の「理論」に対する評価は、否定的なものではなく、むしろ社会学理論の今後を展望するうえで、示唆に富むものといえるのではないだろうか。

註

- (1) 今日では、社会学理論をミクロ／マクロに二分することよりも、むしろすべての理論において、その「立脚点」がどこにあるのかという違いがあるだけで、実質的にはミクロ／マクロの両要素が相互に反映し合っているという捉え方が一般的である [Alexander, 1987 など]。
- (2) 「自然主義」とはゴッフマン独自の用語であり、相互行為そのものの特性をエスノグラフィックに観察・分析することを指す [Goffman, 1981b]。ゴッフマンがプラグマティズムの思想に立脚したシカゴ学派の出身者であるということを考えれば、彼がこのようなスタンスをとることは自然なことであるが、ゴッフマンはいわゆる「生粋の」シカゴ学派社会学者とは異なり、純粋なエスノグラフィーをもとに、それらを概念化することを通じた理論構築を目指していた。
- (3) 総務省情報通信政策局発行、『通信利用動向調査報告書世帯編』(二〇〇六)によると、日本におけるインターネットの世帯普及率は、一九九〇年においても三・三％に留まっていた。
- (4) 総務省情報通信政策局発行、『通信利用動向調査報告書世帯編』(二〇一〇)。
- (5) 厳密には、ゴッフマンは中期の論文「ゲームの面白さ」(一九六二)において、既にフレームという概念について言及しているが、この段階ではまだ同概念の総合的な考察は行っていない。
- (6) バイトソンはフロイトのいった「欲動」——一種始源的な「力」や「押しあげ」や「うねり」——として無意識を捉えるのではなく、パスカルが提唱したように、意識の理性と同程度にハート——無意識——の理性が正確で複雑な論理と算術からなるも

- のであると主張している [Bateson, 1972=二〇〇〇:二二二]。
- (7) バイトソンは、無意識(感情)のアルゴリズムは、言語のそれとは全く別の方法でコード化されているとし、われわれの意識が大部分言語の論理によって組み立てられているものであるために、無意識のアルゴリズムを意識でとらえることは二重の困難を伴うとも指摘している [Bateson, 1972=二〇〇〇:二二三・二二五]。また、言語／非言語コミュニケーションという二元論はあいまいな部分があり、常に後者がメタメッセージになることも限らないと彼は指摘している。
- (8) ゴッフマンは「フレーム分析」のなかで、現代社会におけるフレーム形成の困難について言及している。現代社会における若者のムーブ(ディスブレイ)の読み込み能力の希薄化に関する一考察として、速水(二〇〇九b)を参照頂きたい。

文献

- Alexander, J. (ed). 1987 *The Micro-Macro Link*, University of California Press. = 一九九八、石井幸夫訳『ミクロ・マクロ・リンクの社会学理論』新泉社。
- Bateson, G. 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Ballantine Books. = 一九九九、佐藤良明訳『精神の生体学』新思索社。
- . 2002 *Mind and Nature: a Necessary Unity*, Hampton Press. = 二〇〇一、佐藤良明訳『精神と自然——生きた世界の認識論』新思索社。
- Berman, M. 1981 *The Re-Enchantment of the World*, Cornell University Press. = 一九八九、柴田元幸訳『デカルトからバイトソンへ——世界の再魔術化』国文社。

Collins, R., 1980 "Erving Goffman and the Development of Modern Social Theory", *The View from Goffman*, J. Diconed, The McMillan Press.

_____, 1984 *Sociological Theory*, Jossey-Bass Publishers.

Fine, G. A., Manning, P., and Smith, G., 1984 "Forward", *Erving Goffman: Sage Masters of Modern Social Thought*, Sage Publications.

Goffman, E., 1953 *Communication Conduct in an Island Community*, Ph.D. Dissertation (Unpublished), University of Chicago.

_____, 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*, NY: Doubleday, Anchor Books. = 一九七四、石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房。

_____, 1961 *Encounters: Toward Studies in the Sociology of Interaction*, De Bobbs Merrill. = 一九八五、佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』誠信書房。

_____, 1963a *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press. = 一九八〇、丸本恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房。

_____, 1963b *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice Hall. = 一九七〇、石黒毅訳『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房。

_____, 1967 *Interaction Ritual Essay on Face to Face Behavior*, Doubleday, Anchor Books. = 一九八六、広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』法政大学出版局。

_____, 1969 *Strategic Interaction*, University of Pennsylvania Press.

_____, 1971 *Relations in Public: Micro-Studies of the Public Order*, Basic Books (hardcover).

_____, 1974 *Frame Analysis: Essay on the Organization of Experience*, Harper and Row (paperback).

_____, 1983 "Presidential Address", *American Sociological Review*, 48.1, pp 1-17.

速水奈名子、二〇〇四「コミュニケーションにおける身体の役割——ゴッマンとミードにおける『意味』の問題を通して——」『社会学雑誌』第二一号、一五六・一六九、神戸大学社会学研究会。

_____, 二〇〇五「第七章 身体社会学におけるゴッマン理論」大野道邦・油井清光・竹中克人編『身体社会学 フロントティアと応用』一〇六・一七九、世界思想社。

_____, 二〇〇六「身体社会学とゴッマン理論」『コロキウム：現代社会学理論・新地平』第二号、八〇・一〇二、発行：東京社会学インスティテュート・コロキウム企画編集室、発売：新泉社。

_____, 二〇〇九a「第十二章 現代社会における自己形成と身体——ゴッマンのフレイム論をもとに」『文化の社会学——記憶・メディア・身体』二四四・二六二、文理閣。

_____, 二〇〇九b「ゴッマン理論における個人化」『社会学史研究』第三一号、一九・三四、日本社会学史学会。

片桐雅隆、一九八九「意味と日常世界——シンボリック・インタラクシオニズムの社会学」世界思想社。

_____, 一九九三『シュッツの社会学』いなほ書房。

McLuhan, M., 1962 *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press. = 一九八六、森常治訳『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』みすず書房。

_____, 1964 *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York: McGraw-Hill. = 一九八七、栗原裕・河本仲聖訳『メディア論——

人間の拡張の諸相』みすず書房。

Meyrowitz, J., 1986 *No Sense of Place: the impact of electronic media on social behavior*, Oxford University Press. ≡二〇〇三、安川一・高山啓子・上谷香陽訳『場所性の喪失…電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新曜社。

Parsons, T., 1937 *The Structure of Social Action*, New York: Free Press. ≡一九七六・八九、桶上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造』(一)―(五) 木鐸社。

——, 1951 *The Social System*, New York: Free Press. ≡一九七四、佐藤勉訳『社会体系論』青木書店。

Schutz, A. and Parsons, T., 1978 *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, R. Grathoffed, Indiana University Press. ≡一九八〇、佐藤嘉一訳『A・シュッツ≡T・パーソンズ往復書簡・社会理論の構成』木鐸社。

Winkin, Y., 1998 *Erving Goffman "Les momentset leurs hommes"*, Editions du Seuil. ≡一九九九、石黒毅訳『アーヴィング・ゴッフマン』せりか書房。